

目次

寄稿:留学体験記 (金子 美穂)	1~2	寄稿:英語力を磨くためのPodcast活用法 (大久保 達夫)	8~9
寄稿:政治学での挑戦 (片桐 範之)	3~4	報告:3月15日名古屋大学留学シンポジウム	10
わが街/専攻紹介: 森林学 (UMaine in Oriono, ME) (林 礼)	4~5	お知らせ:STeLA Leadership forum 2012 参加者募集	10
わが街/専攻紹介: 教育学 (UCLA in Los Angeles, CA) (山田 亜紀)	6~7	連載: The Philosophy of a Bohemian - (1) 「冒険について」 (小野雅裕)	11
		学生会からのお知らせ	12

寄稿:留学体験記

Yale University
金子 美穂

私はYale University の化学科博士課程に在籍し、有機化学の全合成を学んでいる。32歳の若い教授のもと、複雑で比類のない構造をもち、抗がん剤として注目度の高い「天然有機物L」(頭文字がLの化合物)を合成しようとしている。私が博士課程で挑戦している課題は、「人間に造れるものの限界」である。「どうやって造るか」ではなく、「果たして人間に造ることはできるのであるか」である。ある朝、教授が研究室にやってきて、「天然有機物Lに対する誓約書」を差し出した。「私は、人間の可能性の限界に位置するものを造ろうとしていることを理解している。この分子を完成させるために全力を尽くしたら、失敗は存在しないということを理解している。」と書かれた誓約書に、教授とポスドクと私の3人がサインし、皆で気合を入れ直した。この誓約書を額に入れて机に飾り、毎日やる気を奮わせて研究に臨んでいる。

きっかけは200円の英語参考書

私はいつからアメリカで研究をする運命になったのか。きっかけは200円の英語参考書の古本である。私は山口県宇部市で生まれ育った。両親高卒、家族親戚は日本から1歩も出たことがなく、外国語や異文化、高等教育という概念には無縁であった。両親と山登りやキャンプに出かけたり、山菜を集めたり、化石を掘ったりしながら幼少時代を過ごした。塾に通ったことは一度もない。小学校中級のころ、父が古本屋で英語参考書を買ってきて、父本人が高校時代に大の苦手だったという英語を、早いうちから家で教えてくれた。

早くから英語を始めたおかげで、中学高校では英語が大好きになり、次第にアメリカへの交換留学に憧れた。しかし当時はバブル経済に続く不況の影響で、私の家族は経済的に苦労していた。将

来の大学進学も、奨学金を最大限に借りて、ようやく日本の国公立大学に行かれる程度であった。下には妹もいる。そんな限度いっぱいでの経済状況で、高校生交換留学という夢のような話を両親が支えてくれた。「家を売ってでもアメリカに行かせてやるからな。」と父が背中を押してくれた。

高校留学を終えたのち、山口県に戻って、地元で国際交流団体を設立した。その活動中に山口大学の教授で、ご子息がアメリカの大学院博士課程にいる、という先生と知り合った。その教授から米国大学院のシステムについて教わり、そのときにアメリカに戻って、理系で博士号をとる、という人生の選択肢を思いついた。当時はまだ18歳。それ以前に博士号を意識したことは一度もなかったが、米国理系博士号という人生の駒の進め方にチャンスを見出した。有機化学にたどり着いたのは、大学に入ってから運のめぐり合わせである。



(写真) Hall of Graduate Studiesの中庭

ノースダコタ州でスタート

アメリカの大学院で学ぶという目標ができてからは、大学もアメリカに行って着実に準備を進めたいと思った。学部時代からしっかり勉強を積み、十分なコミュニケーション力を培うことができると想像した。しかし、アメリカの大学は学費が年間何百万円もする、と一般的に言われている。何か例外があるに違いないと、毎晩何時間もかけて全米の物価の比較的低い地域の大学を全て調べ上げ、ついに見つけたのが、ど田舎のノースダコタ州にある、理系教育に熱心な中堅大学。学費は年間60万円程度、生活費も家賃相場は月2、3万円程度という破格の穴場である。内陸の真北に位置し、海も山もない平面上で、長い冬は極寒で4月の終わりまでひどい雪嵐が続く。白人社会で、大半の学生は地元出身者である。努力を重ねても、気の合う友人が思うようにできず、「孤独」という言葉を身をもって経験した。そんな閉鎖的な環境で、1年生のときから一人、毎晩深夜まで図書館や研究室にこもって勉学に励み、雪の積もった、マイナス20度以下の帰路を歩いた。さらにほかの留学生と競って、留学生協会のボランティア活動をこなし、その結果、ノースダコタ州教育委員会の奨学金で3、4年生の2年分の学費全額を免除された。

地図帳に載っている、高速道路を走りながら進んでいくのが人生とは限らない。

他人目からすれば、そこまで無理をしなくても、日本に留まれば、東大や京大のように、アメリカの無名大学よりも優秀な、有機化学を学べる環境はあったのに、と言われるかもしれない。しかし、地図帳に載っている、高速道路を走りながら進んでいくのが人生とは限らない。苦労をほとんど経験したことのない18歳のときに、アメリカの大学院に行くためになるべく早くアメリカに渡りたい、という情熱に駆られて私は人生選択をした。その全力投球だった4年間で得られたことはすべて私だけの一生の財産であって、他人がどう評価するかなどは関係がないし、誰からも奪われることはない。

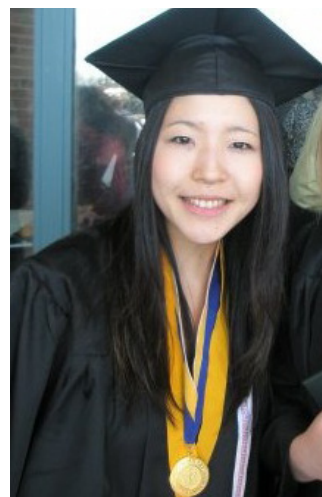
大学院で東海岸へ

2010年、修行の地をあとに、念願の東海岸に引っ越してきた。入りたい研究室を決めていたので、6月から早期入学した。私が選んだのは当時30歳の助教の先生のお部屋である。先生自身が研究室で毎日実験をし、細かいテクニックまで指導してくれる。この先生になるべく近くで学びたいと思い、先生の提示してくれた中で最も難関なプロジェクトを選んだ。「天然物Lの全合成」である。全合成とは何か、というと、有機化学反応を用いて、簡単な分子から始めて複雑な構造の化合物を作り上げることである。ターゲットは多くの場合、天然に存在する化合物で、生物学的に価値のあるものが選ばれる。天然有機物Lは2001年に発見され、ここ10年アメリカの有機化学の大御所の先生方が合成を試みてきたが、いま

だに完成を見ていないのである。天然物Lは細菌の代謝物質から得られるが、入手できる量がごく僅かであるため、抗がん作用のメカニズムが研究されていない。この天然物の全合成が可能になると、人間が大きいスケールで作ることができるようになり、抗がん剤としての働きをより詳しく理解することや、新しい薬の開発に役立terることにつながるのである。という、表向きの動機もあるのだが、実際に化学者が気にしていることは、「こんなわけのわからない構造でも、有機反応だけで作ってしまうのだ」という、化学の限界の範囲を拡大させることの方であったりもする。

全合成の仕事は体育会系である。週6日、一日平均13、14時間働いている。朝8時から一日中緊張感を保ち続けて、昼食や夕食を忘れて実験を回しても、夜中の1時までかかる、という日もある。ゆるい研究室の学生たちは6時に帰って、平日でも余裕でバーに通っている人もいる。同じ年に入学した人同士でも、ある人は2年目の終わりに1冊300反応のノートが4冊目、ある人は2冊目あたり。卒業するころには、同じ大学院の同じ学年でもPh.D1つで1000反応分以上の差がつくのである。学位などというものは飾りの一つに過ぎず、イエール大学の博士号が誰かの人生を安定にしてくれるなどということはない。博士課程の5年間に可能な限り多くを学び、次のステップにつないでいかなくてはならない。

化学の研究は長い道のりで、研究者の能力や努力の量とは無関係に、なかなか実を結ばないこともある。半年も一年も何も新しい発見がないということもある。途中で飽きてモチベーションを落とすことのないよう、単調な日々の中で、小さな発見や進展から喜びを得られるようなくてはならない。これからまだ先3年続くのだが、研究がうまくいかない時期も、自分の辿ってきた道や自分を支えてくれる人や環境のことを忘れないで前進していきたい。あるもの全てを投資してくれて、本人たちの未知の世界へ送り出してくれた両親、私の複雑な研究課題を可能にしてくれる、高度な設備の整った研究施設、私の学部時代の教育費を支えてくれたノースダコタ州民の税金・・自分ひとりで今いる場所に辿り着いたわけでは決してない。教授と結束を誓い合った、私たちの夢がいつか完成するように、謙虚に努力を続けていきたい。



金子 美穂
Department of Chemistry
Yale University

寄稿:「政治学での挑戦」

Air War College, United States Air Force
片桐 範之

皆さん、こんにちは。私は現在、アラバマ州はマックスウェル空軍基地にあるアメリカ空軍の大学院で、主にアメリカ空軍の大佐と中佐を教えています。空軍の教育施設の多くが位置するこの基地には、ゴルフコースが2つあり、加えて退役した爆撃機やヘリコプター、そして歴代の戦闘機が展示されています。朝の早い時間にはラップが基地全体を流れ、毎日のように輸送機が轟音をたてて訓練する、そんな職場です。その中にある私の大学の生徒の数は250人強で、その中でも世界の数十カ国から空軍左官が留学生として送られ、軍人と民間人の両教員陣の元で勉強しています。私が教えている授業は国際関係学、アメリカの外交政策、そして東アジアの政治です。生徒の多くは私よりも年上で、その多くは最近イラクやアフガニスタンから戻ってきた、将来のアメリカ軍を担うエリートたちです。

私は大学院で国際安全保障学を学んだため、ここでの仕事は私の専門によく合っています。私は日本のいたって普通の家庭で育ち、地元の公立の小中学校を卒業しました。高校を卒業した後は大学からアメリカで教育を受け、政治学博士課程の卒業と同時に就職しました。従って学部課程を除けば、多くの読者の方々と同じような環境で育ちました。

ただ私がどうやってここに着任したか多くの方々に興味があると思います。今回はその話をしながら、近い将来政治学の分野で活躍したいと思っている日本人の方々に応援のメッセージを送りたいと思います。具体的に主張したいのは、いくつかの方法を取れば難関だと思われる大学院でさえも合格は可能であり、卒業もしっかりできるということです。そのためにここでは、博士課程入学への戦略と卒業するまでの過程を書きたいと思います。

政治学のPh.D

まず最初に、政治学の博士課程の状況です。この分野でアメリカで勝負する日本人の数は少なく、逆に中国、韓国、インド、トルコを含む他の国からの留学生は増える傾向があります。我々の数が比較的少ない理由は、日本の大学や研究・政府機関にはアメリカの卒業生を受け入れる社会的基盤が弱いため、入学希望者がそもそも少ないことが挙げられます。結果として卒業生の数も少ないので、アメリカにおける政治学には日本人社会のインフラが弱く、多くの場合個人の手で道を切り開いていかななくてはなりません。ただ、先輩の数が少ないからこそ逆に、個人の人間としての成長や、知り合った方々との関係が強くなるメリットがあると思います。

政治学部入学への競争率が高いことも、日本人の少ない理由の一つです。教授職は長期的には安定するため、今のような不景気には出願数は増える一方、奨学金を与えられる生徒数に限りがあるため、受験の競争率は年々激化しています。また、日本人の英語力や文化的対応力の有無、卒業後すぐ日本帰国といった学部との方向性の不一致、そして将来アメリカ政治学界に貢献するか否か



片桐 範之
Assistant Professor, Department of
International Security Studies, Air
War College, United States Air Force

といった疑問があることも挙げられます。このような日本人受験者としてのハンディキャップがあるため、その博士課程プログラムに入っても成功できる、長期的にそのプログラムにとっての財産になると強く証明することが、他の受験生と比べて必要になります。言い換えれば、そのハンディキャップを肯定的に裏切る事によってアメリカでも勝負のできる日本人もいるんだという見方を構築する事ができます。

事実、合格するための秘訣はいくつもあります。私のブログでも書いていますが(<http://psf.dreamlog.jp/>)、学部時代の勉強を頑張ること、必要であれば修士課程で成績を向上させること、留学経験者にコンタクトを取り受験書類に目を通してコメントをもらうこと、目指す学部の「入試委員会」を構成する教授陣の情報を集め、できるだけその教授の興味を引きそうな研究内容を考えることなどは周知の通りです。更に知っておきたいこととして、すでに日本人を卒業・就職させている実績を持つプログラム、もしくは日本政治の研究者がいるプログラムも日本人を受け入れる体制が整っています。それに加えて私が薦めたいのは、受験校の教授に予め連絡を取り、個人的に会いに行き、研究に対する情熱を目を見て直接伝え、その旨をエッセイ(personal statement)で説明することです。こうした地味な努力も合格の鍵を握る秘訣になります。

学位取得後の就職活動

政治学の博士課程を卒業するためには入学から5・6年を要するだけでなく、内容も大変です。私も在籍中は何度も苦労して挫折も味わいました。また、多くの日本人にとっては、英語だけでなく専門分野の言葉をマスターするための壁があります。ただその壁を乗り越える手段はいくつもあります。授業は真剣に受け、成績も一定のを収めること、自分がトラブルに陥った時に守ってくれる教授を見つけること、学部社会に溶け込み同僚との関係を構築すること、そしてその同僚を通して学部外の情報交換に努めることなどがあります。また、授業で書いた論文をジャーナルに寄稿することも大切です。「Publish or perish」という言葉に代表されるように、

研究者として成功するためには結果が重要ですが、その過程も重要です。仮にすぐに立派な実績につながらなくても、その努力をアピールし続ける事で将来性の高い研究者としてのシグナルができるからです。

さてどうやって就職活動をすべきか。この面での私の経験は限られていますが、アメリカ政治学会などアカデミックな学会でのネットワーク作りと同時に、在籍中にできるだけ多くの論文を出版することは大切です。そして博士論文に関して不安を感じる読者の方もいるかと思います。実際、博士論文は就職活動をする上で重要な位置を占めます。博士論文に関して一番重要なことは、長期のプロジェクトになるため、何よりも自分が強い興味と意志を持ち、しっかりと終わらせることのできるようなトピックを選ぶことです。大学時代の恩師への忠誠心や義理などの感情や、地理的、言語的な利点から日本に関わる博士論文を書きたくなる気持ちは理解できますが、日本はアメリカの政治学界で必ずしもメジャーな国とは言えません。その結果として自分の就職を不利にしたら、それは良い戦略だとは思いません。そしてもし日本の政治問題に

興味がない場合は、あくまで独立した研究者として興味を強く持つトピックを選ぶべきだと思います。仮に一時的に周囲の期待に沿わない題材であっても、自分の熱意をしっかり持って説明すれば周囲も理解してくれます。日本の外に出ることは大変な作業で多くのリスクを伴うものですが、その価値は十分あります。

このような経験を経て、私は今の職場で働いております。ここは私が大学院で学んだことの多くを発揮できる素晴らしい所で、空軍があらゆるサポートをしてくれています。私の基本的なモットーは、努力を続ける限り今までの夢を現実にできるという信念です。受験の準備の際にもいくつかのハードルがあるでしょうが、夢に向かって毎日努力をしてください。自分の力が足りないときでも、予想以上に他の人がサポートしてくれるでしょう。私のブログには私のメールアドレスも掲載しているので、関連する質問があればお気軽にご連絡下さい。

※ここにある見解は私個人のものであり、必ずしもアメリカ政府、国防総省、もしくはアメリカ空軍戦争大学の政策を反映するものではありません。

わが街／専攻紹介： 森林学(UMaine in Orono, ME)

University of Maine
林 礼

辺鄙な田舎町

University of Maine (UMaine)のあるMaine州Orono市(人口約9,000人)は、Bostonより北東に約400km、カナダの国境まで約200kmに位置します。UMaineの学生はこのOrono市、あるいは隣のOld Town 市かBangor 市に住んでいます。私は2010年より生活していますが、最初に驚いたことは、韓国車の新車販売の勢いが凄いことです。アメリカにて、こんなにも韓国車の割合の多い町を見たことがなかったので、これは凄く新鮮でした。また私が住んでいるアパートは普通に住宅街の中にあるのですが、アパートの前をムースが散歩しているのをこの冬は2度目撃しています。このOrono市と近隣の町はとても州立大学があるとは思えないくらい小さい町であり、College Town と表現するには大きな抵抗を感じます。週末に買い物、あるいは洒落たレストランやバーでの雰囲気を楽しみたい、と言う方には全く不向きな町です。Orono市のダウントOWNには飲食店が5軒、バーが2軒、そしてコーヒー屋が1軒(しかも午後4時に閉店)、その他雑貨屋等が数件しかありません。しかし、近隣の町を合わせると、4軒も日本食屋らしき物がありますが、私は足がすくんで踏み入れることができないでおります。

魅力的な情報もお届けしようと思います。大学周辺には、夏はトレイルランニング、冬はXCスキーやスノーシューが楽しめるコースが数箇所あり、カヌーを楽しめる川や湖も豊富にあることから、アウトドア派には最高の土地になること間違いなしです。現在アウトドア派では無い方でも、カヌーも含め道具は大学でもレンタル

をしているので、お安く挑戦できます。また Baxter State Park や Acadia National Park などの公園も周囲に点在しているので、ハイキングやキャンプにもってこいの土地です。スポーツに関してはUMaineのアイス・ホッケーは強豪であり、学生の多くが試合観戦に熱をいれています。私もつい先日、東海岸地区のプレイオフ観戦に行ってきた。ルールを全く知りませんが、何しろ熱くなれるのは楽しいことです。辺鄙な場所にある大学と町ですが、遊びには事欠かないでしょう。

私が最も気に入っている場所はOld Town 市にあるCandlepin Bowling場です。大昔、クイズ番組か何かで話には聞いたことがあったのですが、実際に目にしたのは生まれて初めてのことでした。普通のボーリングの腕前は140くらいですが、スペアーは取れてもこのCandlepinでストライクをいまだに取れずにいます。挑戦したい方がおられましたら、是非、UMaineのある我が町をお訪ね下さい!

北の大地で学ぶ森林学

UMaineは1865年に創立された州立大学です。学部生約9,000人、大学院生約1,300人と州立大学としては小規模な大学です。このUMaineに School of Forest Resources (SFR)が誕生したのは1902年のこととなります。SFRの規模は約20人の教授陣、約140人の学部生、そして約65人の大学院生で構成されています。現在、学部生の中に留学生はいませんが、院には約8人が在籍しています。Forestry(森林学)と言う学位を博士課程までオ

ファーしている大学は全米で35校前後しか無いと思いますが、UMaine SFR はその中でも特に学科の独自性と規模を維持している数少ない大学です。また修士課程、あるいは博士課程から森林学へと専攻を変えた学生が15%ほど在籍しています。文系からでも理系からでも入れる敷居の低い学問と言えると思います。UMaine SFRでの私の研究分野は森林リモートセンシング(リモセン)で、Ph.D 取得を目標に2年目を終えようとしています。

森林学という分野の面白さは、大学がどの地域生態系に属するかで学べる、あるいは研究できる内容に大きな違いができることです。大学院を志望する場合は、大学院を探すのではなく、興味のある特定分野を専門とする先生を探すことが第一歩になります。では地域生態系がどのように関係するのかですが、例えばMaine州の森林で大規模火災が発生する確率は200~2200年に1度と認識されており、その関係で森林火災について研究している先生はゼロです。その代わりと言っては変かもしれませんが、自然災害の1つとしてMaine州では35~120年に1度の周期で spruce budwormが大発生すると言われています。これはspruceやfirと言われる樹種に甚大なる被害を及ぼす蛾の幼虫のことです。Spruceとfirの分布領域が広がるMaine州では、市場価値の高いspruceへの被害は見過すことのできない事象であり、その為 spruce budwormに絡んだ様々な研究が盛んです。現在の森林管理に関する州の法律は、1970年代に起こった大発生を起因として施行されており、この法律に拠って様変わりしたMaine州の森林状態を様々な観点から研究するのは、森林学が地域生態系と共に地域社会とも密接に関係するためです。その地域社会から見た森林学の一例としては、西海岸の森林の大半は公有地に対して、東海岸の森林の大半は私有地で占められています。その為、レクリエーションを含む市民が望む森林のあるべき姿にも大なり小なりの違いがあり、地域社会学見地からの研究も盛んに行われております。これらの例とは逆に、地域生態系や地域社会性とは独立傾向の強い分野もあります。Forest bio-product (バイオ燃料等)に関連する分野がその一例になります。

大学院での講義の多くは討論形式が多いのですが、残念ながら丁々発止の遣り取りが繰り返られるような討論は森林社会・経済・法律学系では体験できるようですが、私が履修してきた造林学系、森林管理学系の討論ではなかなか起こりません。それでも討論を主導する役回りが回ってくる週は、その下準備に追われます。また、多くの授業では社会科見学が組み込まれており、国・州・企業・個人の森林に出向いて話しを伺ったりするのですが、大学の先生とは違い、話すのに馴れていない方々の話は四方八方に飛ぶ傾向が強く、しかも雨や雪、強風の中だと、私は殆ど聞き取れておりません。試験の多くは持ち帰りの小論文形式であり、何を参考にしても良いことが逆にプレッシャーとなり、毎度時間ばかり浪費させています。そして、多くの授業では Term Projectも課題として出されるのですが、学期内に完結させられ、講義の内容に沿ったプロジェクト内容を探し出すのは難しく、2ヶ月近くが題目選びで過ぎ去り、当たり前のように学期末はそのレポートとプレゼンに追われます。

メイン州複層林でのフィールドワーク

夏休みは多くの研究室がもぬけの殻になります。院生がデータ採取(fieldwork)に追われるためです。秋学期に入学して最初の夏を迎える前に研究の目的・調査方法・解析方法等を確立させることができれば、MSで2年、Ph.Dで3年での卒業が現実味を帯びます。Fieldworkが必要な研究では、1~3人の学部生を夏の間には雇うのも珍しいことではなく、3ヶ月以上一緒にキャンプをしながらの生活が待っていたりします。逆に既に得られているデータを使って研究する分野もあれば、アンケートを中心とした調査が主体の研究、実験室にこもって薬品類と睨めっこしている研究等、実際の夏の過ごし方は千差万別です。私は夏に猛威を振るう北部 Maine州名物(?)蚊の大群との死闘を避けるため、冬から春に行っております。気温零下10℃を選ぶか、蚊を選ぶか難しいところですが、私の実験地は大学から近いので、講義の無い日を選んで出かけております。

私は Oregon State University と University of Georgia にてBS(森林管理)とMS(森林資源)を取得、そして現在に至るのですが、UMaineを選択したのはアメリカでは珍しい複層林を形成するMaine州の森林に強く惹かれたのが理由です。この複層林を考慮したとき、私の研究内容であるリモセンをどのように活用させることができるのか、と言う研究心が沸いたからです。森林リモセンを簡単に説明すると、航空・衛星写真、あるいは特定のセンサー(熱センサー、LiDAR、レーダー)で得た情報より、森林面積の推定、過去と現在の森林面積の比較、野生動物生息域の特定、森林バイオマスの推定などを行うことです。現在、森林の状態を正確に把握しようとするならば、人間が時間をかけて現場にてデータを採取する必要があるわけですが、1ha程度の雑木林ならばともかく、1万haにもなってしまうと、とても森林内の隅々までを見て回ることは不可能です。リモセンを用いることで短時間に、かつ低コストな森林管理を実現させるための道具を目指しての研究と言えます。

最後に、アメリカの大学で森林学専攻を志す方へですが、目指す学位が Master of Forest Resources (修士論文無し)であっても、ほぼ100% tuition+stipend が貰えると思います。アメリカで学んだ事が日本の森林資源のために役立つかは分かりませんが、少なくとも費用の面を考えれば敷居が低くなるのではと思います。



林 礼
School of Forest Resources
University of Maine

わが街／専攻紹介： 教育学(UCLA in Los Angeles, CA)

私が留学している大学院はカリフォルニア州ロサンゼルスにあるUniversity of California, Los Angeles校です。キャンパスはロサンゼルス市内にあり、少し行けばハリウッド、ビバリーヒルズ、またサンタモニカビーチがあります。ここで私はUCLAの教育大学院のドクターコースに所属しています。

私はUCLAのドクターコースには、日本で修士課程を修了してから入学しました。自分にとっては三度目のアメリカ留学です。アメリカで学位取得を目的とした留学をしたい、しなければならないと思うようになったのは学部四回生の頃でした。学部時代に大学の交換留学でUCサンタバーバラ校に留学をする機会があり、修士のときも一年スタンフォード大学に留学することができました。そこで多くの経験が今の自分につながっているといっても過言ではありません。

ロサンゼルス

UCLAは日本人学生が学ぶ所にとっては少々誘惑の多い街かもしれせん。なぜなら日本人コミュニティが他の州より多く存在しているため、日本食に困る事はないという点、またアジア系移民が多いので、アジア系の料理が常に堪能できるという点です。西海岸はやはりアジアから近いという事も多くのアジア系移民コミュニティに遭遇する事ができます。またメキシコとも比較的近いので(サンディエゴ程ではありませんが)、メキシコ料理など他の地域の料理や文化に浸る事ができます。そして何よりも映画の街ハリウッド。キャンパスを歩いている時に、何度か映画やドラマのワンシーンをキャンパス内で撮影している現場に遭遇しました。映画やドラマのキャンパス設定の中でUCLAを使っているのでしょうか。バスも比較的便利に運営されているので、ハリウッド辺りを散策、リトル東京とリトル大阪にいたりすることも可能です。また気晴らしになるのが、毎週キャンパスで開かれている学生のため



(写真) UCLAの看板の前で記念撮影

University of California, Los Angeles
山田 亜紀



山田 亜紀
Graduate School of Education
and Information Studies, UCLA

の映画上映です。キャンパス内に大きな映画館が設備されており、最新の映画や海外の映画なども上映されています。私は気晴らしにこちらのキャンパス映画館で映画を何度か見た事があり、非常によい息抜きになりました。

そしてザ西海岸、ロサンゼルスと言えば海、ビーチですね。サンタモニカビーチや、レドンドビーチ、マンハッタンビーチ、ベニスビーチなどサーフィンやランニング、散歩などができるビーチが沢山あります。と言っても私はあまりビーチの方には行かないのですが、自分の研究領域に関連しているためロサンゼルスにある日系移民のコミュニティ、リトル東京やリトル大阪の方にちよくちよく散策しにしています。華僑系、韓国系、インド系、ベトナム系、フィリピン系、エチオピア系など数えきれない程のエスニック・コミュニティがロサンゼルス近くにあるため、多様な人種の文化に多く直接浸ることができるのもロサンゼルスで学ぶ醍醐味のの一つかもしれません。

キャンパスを歩いているとこれぞ西海岸、ロサンゼルスという雰囲気も多く出くわす事があります。気候は基本的に一年中温暖で、昼間は暖かく太陽が殆ど照っており、夜になると温度が下がりジャケットは必須といった感じです。キャンパス内を歩いているとスケートボードに乗りながら学内を移動している学生、勉強道具を片手にジムに向かう学生、スポーツ選手など多様な学生たちに遭遇できます。しかし院生はやはり研究メインの生活をおくっているように私には見えます。また、キャンパスを出るとUCLAの学生街で知られるWestwoodという街があります。多くのお店があり、有名なFOX映画館もあり、たまに映画のプレミアがあり俳優人などがプロモーションで直接こちらのほうに足を運びに来たりもします。そういう意味では繰り返しになりますが勉強するには少々誘惑の多い街かも知れません。

研究科の紹介

Graduate School of Education and Information Studiesが正式な大学院の名前です。教育学大学院で、複数研究科に分かれており、私はその中で比較教育を専門としているSocial Science and Comparative Education専攻に所属しています。マスターコースとドクターコースの二つに分かれており、留学生は5人、後はアメリカ人学生です。ドクターコースは修士学位を取得している学生が対象となりますので、修士と博士課程が一環しているというプログラムではありません。UCLAは州立大学なので学部生はカリフォルニア住民の学生が大半で、院生では大半までとはいきませんがやはりカリフォルニア住民以外は少数です。(大学院のURL <http://gseis.ucla.edu/>)

私の所属している研究科の比較教育学専攻ではヨーロッパ圏の研究、アジア圏、ラテンアメリカ、アフリカ、そしてアメリカを専門としているファカルティが所属しており、その教員のもとで学生は自分の研究地域をベースに比較教育学の歴史、アメリカの今日の教育問題、アメリカの教育史、人種における教育問題等を学んでいます。比較教育学専攻は、さらに哲学、人種、比較の三領域に分類されており、学生はその三領域の中から一領域と地域を選択し、自らの研究を行います。私は比較を選択して、アメリカにおける新しい日本からの移民、新一世と新二世日系移民の教育的価値観と戦略を研究しています。こちら来る前までにはある程度の日本の教育、高等教育、教育全体の内容はある程度理解し説明できるように準備していました。ここでは、私は比較教育学専攻に所属していますので、授業内でもしばし日本での経験、日本の教育や社会はどのようなものなのかとクラス全員に説明する機会が非常に多くあります。周りの学生も日本の教育制度、実態をあまり知らない方が多いので、お互いにとっても学び合い、刺激できる素晴らしい機会です。

クラススタイル

まだこちらにきて一年目なので、今は社会科学における方法論、理論、教育のバックグラウンド等必修コースを中心に同期の仲間と履修しています。学生の大半は国際的な視点を視野に入れながらここで学んでいるため、アメリカ内だけには留まらず、海外を視野に研究をしているように思えます。

一クラスの受講生は平均10人程度という小クラスで、ディスカッションが多く導入されています。UCLAは研究大学として有名な大学なのでファカルティたちと学生が常に研究関連のプロジェクト、教育における著名な研究者を招いた研究会、企画が数多く開かれ、参加する機会も豊富です。私も日本の修士段階で、論文を通じて知っていた研究者の先生とこちらにきて直接お会いする機会があり、それは非常に嬉しい出来事でした。

UCLAの教育学大学院に所属する学生は海外を視野に働く人、アメリカで研究者としてファカルティ・ポジションを目指す人、政

府関係など教員になるなど様々なキャリアを目指して研究しています。比較教育学専攻で地域研究を選択している学生は、必修科目を履修し終えた後さらに強化するためその地域に行きフィールドリサーチを行いながら語学を学びに行きます。私はアメリカにいる日系移民を研究しているため語学に焦点はあてておりませんが、同期にはトルコ語、アルメニア語、スペイン語、ヒンディ語などを学んでいる者もあり、二年目の終わりから三年目に直接その現地にいく学生が何名かいます。UCLAの比較教育学専攻はコースワークの必修科目は早い人で一年半で、通常は二年間かけて履修し終え、研究計画書をしっかりと書き上げて、博士論文につなげていくという流れです。日本でもよく同期は大事な仲間と言いますが、こちらでも院の同期は大事な学友と私は思っています。

キャンパスでの情報をフル活用

またファカルティや事務の方々が多くの学会、共同プロジェクト、研究における情報を学生の方に毎日メールで流してくるので、情報量がとても多いのも魅力の一つです。新しい研究におけるプロジェクトの話や、奨学金の話や仕事の話など有益な情報が平日平均で10個以上はメールで流れてきます。しかし多くの情報が流れてくるため決して受け身になるのではなく、実践的に自分でそれらの情報を受けとらえ次の行動に自発的に動かなくてはならないという事をも私はここに来てから強く実感するようになりました。UCLA主催の学会なども社会科学関連で多く開かれているため、自らの研究のためになるものを見つけできるだけ多く参加しているように心がけています。私の研究分野の対象は新日系移民の教育なので、大学院での教育に関連する諸理論、アメリカ教育史、アメリカ社会における人種による教育問題を学ぶだけではなく、社会学、アジア系アメリカ研究、文化人類学などの多様な社会科学のファカルティの方々と交流をとっています。授業を履修するだけでなく、自分の研究分野に近い他学科の院生とのネットワークを拡大するなど、幅広く学んで行く事ができるのがUCLAの魅力だと思います。何よりもキャンパスがとても広く、多くの多種多様な研究領域をカバーしている大学院なので、出会う内容、人々など様々、まさにserendipitous!



(写真)比較教育学会での一コマ

英語力を磨くためのPodcast活用法

Massachusetts Institute of Technology
大久保 達夫

英語圏への留学を目指している人や現在留学している人にとって、「いかにして英語力を向上させるか」は常日頃から頭にある重要な問題であると思う。そのような中、勉強を進めていく上でつい陥りがちなのが、英語を学ぶこと自体が自己目的化してしまうことだ。大学院留学では英語「で」学ぶことが重要であり、英語「を」学ぶことで終わってはいけな。そのためには自分が興味を持てる内容の英語を多く聞くことで、そこに含まれた情報を学びとりつつ、同時に情報を伝える媒体としての英語に慣れていくのが理想的と言える。

幸いにしてインターネットの発達により、英語のラジオ番組やpodcastを聞くのはいとも簡単にできるようになった。そこで本稿では、大学院留学生活で必要となる英語力を磨くのに役立つラジオやpodcastの番組を、目的別に整理し、周りのネイティブ・スピーカー間での評判や、私自身の経験を元に紹介する。なおこれらの番組は、英語を母語とする人が日々聞くものであるため、学習教材よりもスピードが速く語彙も高度である。いきなりは難しく感じる場合は、無理をせず自分が楽しめる所から徐々にステップアップすることが継続するための秘訣である。

1. 時事ネタを仕入れる

専門分野に関する英語は、教科書や論文等を通じて触れる機会も多いので、勉強は比較的しやすい。それに対して、昼休みやパーティーの際の会話では、専門分野を離れた時事ネタが話題に上ることも多く、留学生にとっては難しく感じることもあるだろう。

その対策としては、普段から時事ネタを仕入れることに尽きるが、アメリカの公共ラジオ局のネットワークNPR (National Public Radio)は絶好の教材である。NPRは毎時間5分程度のニュースを配信しており、重要なニュースを短時間で掴むのに適している。これだけ短いと一度聞いて分からなかったところを辞書で調べてから、もう一度聞くといった学習法が可能となる。またMorning EditionやAll Things Consideredの2つの番組では、ニュースの解説から話題の新刊に至るまで、トピックが数分で次から次に移っていくので、流して聞くのに適しており、多くのアメリカ人が通勤時に車



大久保 達夫
Department of Brain and
Cognitive Sciences, MIT

中で聞いている。その他のニュース系としては、同じくNPRから出ているPlanet Moneyがあり、こちらは時事的な経済トピックをやさしく解説している。

2. 最先端の科学に触れる

一流科学誌として有名なイギリスのNatureとアメリカのScienceだが、雑誌だけでなく、podcastも毎週配信されている(Nature podcast, Science podcast)。これらのpodcastでは、その週の雑誌に載った幾つかの記事や論文が取り上げられ、著者へのインタビューや編集部による簡単な解説が加わる。これらのやり取りを聞くことで、自分の専門以外の科学分野でどのような発見があるのかを知ることができ便利である。また論文の著者へのインタビューを聞くことで、最先端の実験結果をいかにして他分野の人に分かりやすく伝えるかの技術を学ぶことが出来る。また Science podcastの番組の台本(script)はオンラインで入手できるため、聞き取れなかった部分は文字にて確認することが出来る。このようなフィードバックがあると、学習効果は大きい。



www.npr.org/programs/morning-edition/
www.npr.org/programs/all-things-considered/
www.npr.org/blogs/money/

www.nature.com/nature/podcast/
www.sciencemag.org/site/multimedia/podcast/

3. 質問力を磨く

大学院生活を送る上では、講義を受動的に聞くだけでなく、不明点を的確に質問する能力が求められる。あたりさわりのない質問では会話の内容は深まっていけないが、かといって不躰な質問をして相手の機嫌を損ねてもいけない。その辺りの匙加減はなかなか難しいが、質問力を向上させるために参考になるのが良質のインタビュー番組である。インタビュー番組と言えば Fresh Air が有名だ。その内容は、30年以上にも渡ってパーソナリティーを務めているTerry Grossが、作家、俳優、企業家からシェフに至るまでの様々な人と対談するというものである。彼女の質問は物腰柔らかくはありながら、時折鋭いところを突き、ゲストの本音をうまく引き出すことに成功している。その他に、オンラインで見られるインタビュー番組としてテレビPBSのCharlie Roseがある。



www.npr.org/programs/fresh-air/
www.charlierose.com

4. ストーリー力を磨く

研究を進めていくためには、実験や理論の結果を出すだけでなく、これらを一貫性のあるストーリーに仕立てていく作業が必要である。そのためには、表面的には関連が薄いと思われる題材の間に、本質的なつながりがあることを見抜いて、あるテーマでひとつくりにして議論することが有効となる。以下に紹介する番組は、毎回一つのテーマを元に、それにまつわる何幕かの小話によって構成されている。

ある家族や個人の生き様を追うことで、アメリカ社会の一面を浮かび上がらせるThis American Life。ここで取り上げられる人々は華々しく活躍するスター達ではなく、普段はなかなか陽の当たらない人たちであるが、その人らの視点から、現代のアメリカ社会が



www.thisamericanlife.org
www.radiolab.org

抱える問題点を浮き彫りにする物語構成力は見事であり、そのシニカルな切り口には毎回驚かされる。

科学的な話や心理学的な現象を取り上げ、軽快な二人の掛け合いからなるRadiolabもストーリー性に優れている。音響効果も凝っており、自然と引き込まれる番組作りとなっていて、上記のThis American Lifeがテーマ的に重いと感じている人には、こちらがお薦めだ。

5. プレゼン力を磨く

大学院での仕事もまとまってきたら、いよいよその成果をプレゼンテーションする番である。20分程度のプレゼンテーションの映像集にTEDがある。カバーする内容は自然科学から人文科学に至るまで幅広く、多くの有名人も登場しそのレベルは高い。ここでのプレゼンテーションは、データを朴訥に語るという日本人好みのスタイルとは異なると思われる方もいるかもしれない。確かにそれも一理あるが、詳細に入りすぎず big picture を伝えることに集中する、スライドを棒読みせず補助的に使う、聴衆との一体感を意識する、といったプレゼンテーションの基本を数多くの事例を見ることで学ぶことができる。



www.ted.com

6. 最後に

このような番組を聞くことで、どのような効果が期待できるであろうか。その一つとして知らない単語を文脈から類推する力がつくことが挙げられる。時事英語の中には難しい単語も多く出てくるので、それらを事前に知っているケースは少ないと思われる。しかし会話の中で、同じ単語が繰り返し出てくるにつれて、次第に自分の中で意味が推測できるようになれば、しめたものである。それ以外にも、会話における重点の置き方に関しても学ぶことができる。どの会話も無駄ないように構成されている教科書とは異なり、実世界の会話はキーとなる質問から、軽く受け流すだけの相槌まで様々な重要度からなる会話が織り交ぜられている。そのような会話に多く触れることで、英語の会話のリズムに慣れることができる。

今回紹介したほかにも、オンラインで入手できる番組は数多くあり、パソコン好き用の番組、音楽好き用の音楽番組等、自分に合うものが見つかると思う。これらの番組は、ネイティブ・スピーカーが聞くものであるから決して易しくはないが、自分の好きな題材の番組を探して、継続して聞くことができれば、英語力のアップのみならず、アメリカの現代社会や文化背景に対する理解の向上にも役立つことと思う。いつのまにか次週のエピソードを楽しみにしている自分を発見できれば、情報をやりとりする手段としての英語が物になってきた証拠である。

報告: 3月15日 名古屋大学留学シンポジウム

留学経験は人生を豊かにしてくれるし、職業選択の幅も広がるといえる。それでも、学生の側からすると、留学経験が社会に出てから具体的にどう役に立つのか、いまいよくわからない。そんな現状を解消すべく、名古屋大学留学生センターが「留学が人生にどう役立つかズバリ語ります」というキャッチコピーで開催した留学シンポジウムに、学生会も後援者として参加しました。ぎっしり満席に詰めかけた学生を前に、まず学生会幹事の坂本が、6年間の米国留学が自分の人生をどう豊かにしたか、具体的なエピソードを交えて話しました。続いて、名古屋大の学生2名が、交換留学の後にした就職活動で重要だったのは、「留学して何を得了のか、自分をどう変えたのか」という具体的内容を語ることで

と経験談を披露。また今後の抱負を熱く語りました。最後にポストン・キャリアフォーラムなどを主催する(株)ディスコの前原氏が、企業が求めるグローバル人材像と、日本の新卒学生の意識のギャップを示す調査結果を踏まえ、留学という挑戦の大切さについて解説しました。登壇者みなが共通して、留学は目先の就職活動に有利なだけではなく、自分の今後の人生の可能性を格段に広げてくれる魅力ある挑戦だと、様々な具体例を挙げながら繰り返し語りました。

シンポジウムの詳細についてはこちらをご覧ください：
<http://gakuiryugaku.net/%E6%9C%AA%E5%88%86%E9%A1%9E/1647>

～この夏、国境を越えて科学を繋ぐ～ STeLA Leadership Forum 2012 in Tokyo 参加者募集

近年、環境問題、エネルギー問題といったさまざまな国際的な課題に対し、科学技術が果たす役割は大きくなっています。問題は時代とともに複雑化し、解決にはさまざまな科学的専門知識が必要とされています。科学技術の分野からも、国境を超えた幅広いネットワークを有し、国際舞台でリーダーシップを発揮できる人材が求められています。



STeLA (Science and Technology Leadership Association) は、「国際社会で活躍する人材プラットフォームの構築」、「科学技術の関わる国際問題解決に寄与」という目標を掲げ、世界トップレベルの大学から科学技術分野の学生を集め、リーダーシップ教育や国際的な問題を多角的に議論する機会を提供しています。米国大学院学生会の小野雅裕さん、橋本道尚さんら2006年の創設に関わり、坂本啓さんにはSTeLAのアドバイザーをして頂いています。現在STeLAは日本、中国、米国、EUの4支部からなり、各国主要大学の学生50人ほどのスタッフが所属しています。

STeLAの活動の中心となるのが、国際合宿型フォーラム STeLA Leadership Forumです。2007年を皮切りに過去5回、毎年8月に日中歐米の大学生・大学院生約50名が参加する一週間のフォー

ラムで、これまで東京、ボストン、カリフォルニア、北京で開催しております。2011年は「環境の持続性」をテーマに米国・Stanford大で開催し、MIT・スタンフォード大・デルフト工科大・北京大・東大・東工大・慶應大・早大らの学生が参加しました。フォーラムの構成はリーダーシップ教育、分科会、グループプロジェクトの3部からなり、参加者に対して国際問題を解決するにあたって科学技術がどのような解決策となり得るか、リーダーシップとは何かを学び実践する機会を提供しています。STeLAに関わった事がきっかけで、米国の大学院に留学した人も多数おります。

今年のテーマは「自然災害」

2012年度のフォーラムは「自然災害」をテーマに8月11-18日に東京・国立オリンピック記念青少年総合センターで開催します。2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震からの教訓を基に、自然災害を防災、災害時、復興の三段階として捉え、各々における科学技術とリーダーシップのあり方を世界各国の学生と共に考え、メッセージを発信します。

STeLA Leadership Forum 2012は、世界中の仲間と共に国際的な課題に取り組む事を目指している大学生・大学院生の皆様の参加応募をお待ちしております。

応募締切(予定): 2012年4月30日(金) 22:00
 詳細は下記ウェブサイトをご覧ください:



<http://web.mit.edu/stela-mit/jp>
 Twitter: @STeLA_JAPAN
stela.japan@gmail.com

連載:The Philosophy of a Bohemian
(1) 冒険について

なぜ僕は6年半前に海を渡ったのか。宇宙工学を志す者としてアポロやボイジャーを作った国に行きたかった。研究者を目指す者として世界トップの環境で修行したかった。以前にWeb記事¹⁾に書いたように、画一化された「シュウカツ」というシステムに人生を決められてしまうことへの嫌悪感もあった。だが、それだけではないと、今振り返ってみて思う。

22歳の頃の僕は、冒険がしたかったのだ。

「冒険」とはなにも、月面着陸や未踏峰の制覇のような大冒険である必要はない。人類にとっては目に見えないほどに小さな一歩でも、一人の人間にとっては限りなく大きな一歩というものがある。そして殆どの人がそれを一度ならず経験したことがあるはずだ。例えばあなたは、大学進学のために親元を離れ、新幹線で東京駅に着いたときのワクワク感を覚えているだろう。子供の頃にはじめて一人でお遣いを任されたときや、はじめて一人で特急列車に乗って祖父母の家まで旅をしたときの不安と興奮が入り混じった気持ち、あの快感を覚えているだろう。冒険への渴望は人間の遺伝子に刷り込まれた本能だと僕は主張する。もしそうでなければ、どうして赤ちゃんは安全で暖かい母の胎内から危険極まりない外の世界へ、自らの力で這い出ようとするだろうか。

なぜ僕は冒険をしたかったのか。直感だ。衝動だ。19世紀の南極探検家、アーネスト・シャクルトン²⁾は、次のような求人広告を打った：

求む男子。至難の旅。僅かな報酬。極寒。暗黒の長い日々。絶えざる危険。生還の保障なし。成功の暁には名誉と賞賛を得る。

こんな求人にどうして多くの若者たちが応じたのか。帰還後の就職活動において有利になるためではあるまい。利益とリスクを定量的に評価し比較したからでもあるまい。彼らが求めたものはきっと、冒険という行為そのものなのだ。未来のために現在の時間を消費するのではなく、現在のために今を生きることを欲したのだ。そのような意味において、冒険とは極めて利根的なものだ。中学時代を高校受験のために生き、高校時代を大学受験のために生き、大学時代を就職活動のために生きるような計画的な人生の対極に位置するものなのだ。

もちろん、受験や就職活動の重要性を否定する気は毛頭ない。しかし、それらに失敗しないために賢く生きることにはばかり気を取られ、「必勝法」なんぞを説いた本を読み漁るうちに、僕たちは少し頭でっかちになってはいないだろうか。生きることに一生懸命になるあまり、生きることを忘れてはいないだろうか。船が美しいのは風を満帆に受けて大洋を進む時である。人が生き活きとするのは目を輝かせ冒険に挑む時だ。若者よ、船の白帆のように皺ひとつなき肌を持ち、竜骨のように逞しき四肢を備えた者よ。その帆

に風を受け、竜骨で荒波を掻き分け、大洋を渡り未知の大陸を目指すがいい。老人よ、肉体や精神の衰えを呪う者よ。それは歳のせいではなく、波静かな港に長い間留まりすぎたせいではなからうか。

僕たちは何に冒険を求めればよいのだろうか。未踏峰がひとつ、またひとつ制覇されてゆくように、時代が豊かになるにつれて冒険の機会は経る一方に見える。一昔前ならば、先祖代々守ってきた田畑を捨てて上京し大学へ行くだけで、村中の騒動になるような大冒険だったに違いない。戦乱の世に生まれれば、カエサルや信玄など武勇轟く将の軍に加わることが冒険たりえた。では、平和で満ち足り、高等教育を授かることまで当たり前の時代に生まれた幸せの上ない僕らは、もはや冒険を小説や映画の中にか求めることしかできないのだろうか。そんなことはない。たとえば起業や転職が現代における冒険たりえる。そんな仰々しいものでなくても、自分が安住している心理的安全ゾーンから飛び出す一歩を踏めば、いつだって誰だって冒険をすることができる。優等生の影に隠れていた目立たない生徒が手を上げて発言をすることだって、髪を染め飾ることでしか自己主張をできなかった人が手に職を付けるために真面目に勉強を始めることだって、事なかれ主義で30年勤めてきたサラリーマンが部下のためにリスクのある決断をすることだって、好きな人に思いを伝えられなかったシャイな男が愛の告白をすることだって。そして、22歳の僕が選んだ冒険が、日本を離れアメリカで学ぶことだったのだ。

かくして僕は、ボストン行きの片道航空券を買った。

当時、長く付き合っていた彼女がいた。何度も泣かれた。約束を求められたが、僕はそれをあいまいに拒んだ。根拠のない期待を持たせる言葉を使って涙を振り切った。

出発の当日、母はカメラを持って玄関に見送りに出て、重たいスーツケースを引きずり駅に向かう僕の後姿を写真に撮っていた。「恥ずかしいからやめてよ」と振り返ると、母は「いいじゃない」と言いながら、寂しさの混じった笑顔を浮かべて、写真を撮り続けていた。



小野雅裕
慶応義塾大学理工学部物理情報工学科 助教

1) <http://kaikoku-japan.net/column/4104>

本記事は全6回に渡って連載される記事の第1回目です。

留学説明会のお知らせ

2012年夏も日本5大学で留学説明会を行います。大学院で学位を修得した・学位取得を目的に留学中の学生が講演者として参加します。各会場の情報は当会ウェブサイトにも適宜アップロードしていきます。会場でお会いできるのを楽しみにしています。

2012年夏、留学説明会日程

- ・5月29日(火) 15時～17時
@九州大学 伊都キャンパス センター1号館1302号室
※箱崎キャンパスへの遠隔中継あり
- ・6月1日(金) 17時～19時
@名古屋大学 留学生センター2階 CALEフォーラム
- ・6月4日(月) 18時半～21時
@東京大学 本郷キャンパス 工学部2号館213教室
- ・6月23日(土) 15時～17時
@東京工業大学 大岡山キャンパス S222教室
- ・7月後半を予定
@東北大学

メンタープログラムより、新しいサービスのお知らせ

今年度のメンタープログラムも終わりに近づき、嬉しいご報告も聞こえてまいりました。さて、これまでのメンタープログラムでは、翌年の入学を目指して出願準備を始められた留学希望者の方々をメンターの対象としてまいりましたが、出願までまだ時間のある希望者の方々からも、留学経験者のアドバイスや経験談を聞くことのできる機会が欲しいというご要望をこれまでに頂いておりました。そのお声にお応えし、現在メンタープログラムでは、出願を数年後に控えた留学希望者のみなさんの質問に対して留学経験者の方々に回答をして頂く会員制コミュニティーサイトの開設を計画しています。詳細は現在検討中ですが、決まりましたら次回のニュースレターや米国大学院学生会ホームページでお知らせ致します。また、現在の形態でのメンタープログラムについても、来年度以降もこれまで通り運営してまいります。来年度のメンタープログラムにご期待ください!

米国大学院学生会 <http://gakuiryugaku.net/>

【ニュースレター編集部】

平林 正稔 石原 圭祐 原 健太郎 大勝 裕子 工藤 朗
newsletter@gakuiryugaku.net

執筆者を募集中!

編集部では、ニュースレターかけはしに掲載する記事を執筆してくれる方を募集しています。ご興味のある方は、上記のメールアドレスにご連絡下さい。また当学生会の他の活動(留学説明会、メンタープログラム)に興味のある方は、当会の学位留学経験者オンライン登録システムに参加お願いします。

<http://gakuiryugaku.net/mp/mentor/login.php>

編集後記

米国大学院学生会の Facebook ページができました。 <http://www.facebook.com/gakuiryugaku> こちらのページから「LIKE」「いいね」をクリックして頂くと Wall に書き込みできるようになります!

今月は思いがけず平林さんとお会いする機会がありました。こうしてニュースレター担当の一員として力不足ながらもお手伝いをさせて頂いていますが、実は初対面でした(笑)こうして他州の留学生とも交流できるのはこのような活動に参加する上での醍醐味の一つだなあと思います。アトランタにいらっしゃる機会のある方、是非お声をおかけ下さい☆ (大勝)

3月末、Georgia Techのアトランタオリンピックプールで開催されたEast Coast Swimming Championshipという大学水

泳クラブの全国大会に参加しました。高校卒業後、試合に参加するというよりはむしろ健康のために泳いでいたのが、いつの間にかまた競泳の場に戻っていました。メダル、総合優勝といった名誉をもらう一方で、最も得て嬉しかったのは出会った大切な友人たち。大勝さんもその一人。僕、28歳。まだまだ泳ぎます。(平林)

Jiro Dreams of Sushiという映画を見た。それはフランスのミシュランが行なっている調査で三つ星の最高級の評価を得た日本の寿司職人の話。主人公の

趣旨職人は85歳でまだカウンターに立ちお寿司を握り続けて、最高のお寿司を追求している。「仕事が好きで、それに惚れないとダメなんだ」と彼は冒頭で語る。これは研究にも通ずるのではないだろうか。いくら賢くても、いくらスキルがあっても好きじゃなきゃ続かない。逆に好きだからこそ、賢くなろうとするしスキルを習得しようとする。自分は何十年か後に彼みたいになってられるだろうか。死ぬまで何かを追求し続けていきたいものである。(原)